
SOUL EATER

コーユー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S O U L E A T E R

【Nコード】

N 0 3 2 3 A

【作者名】

コピー

【あらすじ】

行方不明が多発しているある街、そこでは最初の行方不明者が死体で見つかった。体はからからに乾いており、首筋に犬歯のような牙の傷痕がついていたという…誰かが言った「まるで吸血鬼だ…」と。

ブローグ

「なあ知ってるか？」

「何を？」

「吸血鬼の噂さ……」

「ああ、知ってる……確か体中の血液が無くなってる死体が見つかった話だろ？」

「そう、それだ。また見つかったらしいぞ」

「また？どんな趣味のやつがそんなことするんだよ」

「さあ？」

―夏がおわり秋へと向かっていくこの季節、謎の行方不明事件は不気味な殺人事件へと発展し、そしてある噂を立たせた。

- 吸血鬼の噂を -

第一話：吸血鬼の再来

オレンジ色の光がカーテンを付き抜け部屋を橙色に染めあげる。整然と並べられた、しかし各個人差のある机と椅子のペアが40弱いずれもカーテンと同じ色に染まっている。

日中のうだるような暑さが嘘のように今は暖かい光がそこを照らしている。

窓からさしこんでいる光の柱の下に壁によりかかるようにして座っている男が一人。
手足を投げ出し、だらつとした体勢で一見眠っているようにも見える。

暖かい光がさしこむ教室で軽く一眠り・・・
といったところに見えなくもないが、それは彼のからだの前に赤黒い水溜まりが否定する。

鉄のような金属臭を放ち、ねばっこく、ぬめり気のあるそれは、大量の血液。

橙色の光の柱に照らされ、赤というより黒ずんだ印象を受ける。赤黒いそれは徐々に床を侵食し領土を広げていく。

(…ああ、眠い…な)

首を上げる力もないらしく、ずつとうなだれている。

閉じるか閉じないか、微妙な視界は流れ出す源泉を捉えている。

大きく空いた穴。

学生服を突抜、肉を突抜、背中を預けている壁が見えている。
そこから溢れ出している液体。

(…あーあ、こんなに出血しちまって…)

どこか夢心地で自らに空いた穴を眺める。

領土を広げていた液体はふと、障害物にぶつかり行き場を失う。

真っ白な布地をじわりじわりと赤く染めあげようとする。

白い布地は二カ所にあった。

夕日に染めあげられ薄いオレンジ色になっていたが、逆にだからこそ元の色も容易に想像がつく。そう。それは学校指定の上靴だ。ただ白いだけで飾り気もなにもない。

だからこそ。

それを履いているのは、同じ学校の生徒のはず。

胸に風穴を開けた生徒の前にただ立ち、その様子を観察しているように見える。

その立たず舞いには動揺のいろなど欠片も感じられない。

上靴の上は学校指定のハイソックス。

そこから夕陽に照らされ染まった膝が覗く。

ゆっくりと。

まるで花を摘むかの様に自然な動作で膝を折り赤黒い池にその華奢な体をついた。

ぴちゃ。

ぴちゃ。

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ。

いつの間にか聞こえなくなった運動部の掛け声が消えた静寂の中に、犬が水を飲むような音が響く。

最初は控え目に。

徐々に激しく。

ずず、ずず、ずず、ずず、ずず。

食わず嫌いだった食べ物か、思いの外美味だと知ったかのように。――
心不乱にむさぼる。

ごくん。

――っはあ。

一息つき再び作業を再開。

太陽が沈み、すっかり暗くなった頃には男子生徒の姿も女子生徒の姿も、当然血の跡も綺麗に消えていたという。

第一話：吸血鬼の再来（後書き）

どうでしたでしょうか？ 初めての執筆なものでかなり下手だと思いますが、感想などいただければ幸いです

第二話：昼休み1

「失礼しました」

軽く会釈しながら職員室のドアを閉める。

襟まで止めていたガ克兰のボタンを外し、一息を吐く。

――斎藤について何か知らないか――今担任に聞かれた言葉が頭のなかを巡る。

先日の行方不明事件の被害者が斎藤だった。

よく遊んでいたし、親友といえた間柄かもしれない。

ポケットに入っている携帯を取り出し着信履歴を調べたが、斎藤からの電話やメールは事件前日にはなかった。

こちらからかけてもいなかった。

最後に見たのは、事件前日。

発見されたとき胸には大きな穴が開いていたという。

携帯の画面を待受画面に戻すと12:50を回っていた。

一人が死んだくらいじゃびくともしない世界…自分が居てもいなくてもいいような気さえする。

ゆっくり吐息をはいてのんびりと教室までの道を歩いていく。

- いい天気だなそんなことを考えさせるほど今の天気は雲一つ無い快晴だった -

…と、自分の教室のある別館の方から騒ぎ声が聞こえてきた。
辺りに響く蝉の声に負けないくらい喧しい声は、俺のよく知る声だった。

同じクラスの二人組の声だった。

この暑い日にあんな騒ぎのもとには確実にここよりも温度が高いだろう…

考えただけで汗が噴き出しそうだ。

俺は方向転換し、日陰を求めてあるきだした。

今はたとえわずかでもいいから涼しい場所へ行くことが何よりも大切なような気がしている。

- 暑い。

- 暑い。

- … 暑い。

… なんとか日陰を見つけて腰掛ける。

このまま、汗が引くのを待つことにしよう。

壁に寄り掛かり少し休むことにした（それを一般にサボルトイウ）

第四話：昼休み 2（前書き）

昼休み1と同じ時間のお話です。主人公は名前が出てきませんが、1と2の主人公は別人です。混乱したらごめんなさい。ただ視点が違うという形です。

第四話：昼休み 2

秋に向かって涼しくなっていく季節

「あちい…」

ぼつりともらした言葉は、昼休みの喧騒に吞まれてきえた。

こんなときはぼーっとして過ごすに限る。

へたに行動して体力を削るよりは、よっぽど賢いだろう…（つーか、九月の終わりに蝉ですか…）季節を間違えたらしい蝉が合唱をしていて、なおさら暑く感じる。

今日の昼飯は学校のパンだ。

いつも仲間内で買いに行くやつと、店を決める。

オレが負けたときなんか、片道10分もかかる店を指定されて、夏場チャリを全力疾走させたこともある。

ガラ…勢い良くドアを開けて、本日のパシリ君が登場。

「お帰りパシリ君」

俯せにしていた顔をドアに向けて彼をねぎらう。

…本日のパシリ君出席番号01相川 あいかわいつき 樹君：こいつよりもアイウ

エ才順で早い奴はいるんだろうか…？両手に下げられた袋からパンが顔を出している。

順番にその場所にいたやつに配っている。やっと教室の奥にいるオレの前にきた。

「ほい。」

パンの入った袋ごと放り投げる。

「ん。さんきゅ」

腹の虫を押さえながら袋のなかを覗くと…何ともつまそうな茶色をしたパンの耳が……って、をい！

「…なんだこりゃ？」

オレの問い掛けに相川は、いかにも

「何が？」

と言いたそうな顔をして振り向く。

「オレが頼んだのは何だっけ？」

少し考えてから、ああ！と顔をほころばして、
「無かった」

「で、これは何かな？」

「食パンの耳」

「いくらだった？」

「五百円」

「…いくら渡したっけ？」

「六百円」

「そうか…」

一旦言葉を切り、相川がパンとともに仲間に渡していたジュースを
指差して

「いくつ買った？」

「五本」

「誰の分？」

「上田、松本、自分、坂田、加藤」

「…オレの分は？」

「金が足りなかった」

「ジュース代渡したのか？」

上田を含む四人はみな顔を振る。

渡してないってことは、オレの金でみんなの飲み物を買ったって訳か…。

「わかった？」

顔を覗き込んでくる相川。

「よく分かった」

「そうか。」

満足気に席に座ろうとするところを肩を捕まえて動きを止める。

「オレの金を使ってみんなの飲み物を買ったってことがな…」

「はあ？何言ってるんだよ、お前の分ならあるじゃんか」

「これか？」

パンの耳をもつてみる。

「そうそれ」

「パンの耳が五百円もするか！」

「只のパンの耳じゃないぞ！」

「食パン十枚分か！？」

「二十枚分だ！」

少しづつ後退りする相川

「売店のおばちゃんに無理言って多めに詰めてもらったんだぞ！」

「十枚だろうが二十枚だろうがなあ…」

「パンの耳が五百円もするか！」

その瞬間脱兎のごとく逃げ出す相川。予想していたため追い掛けるオレ。

「そのパンの耳食うから捨てるなよ！」

「食うのかよ！」

上田以下三人の突っ込みを背に相川を追い掛ける。

- いつもとかわからないどたばたとした、これがオレ達のいつも道理の昼休み -

第四話：昼休み 2（後書き）

二人の主人公の別々の視点でいうのをやってみたくて作ってしまいました。いくつか交錯するところがこれから出てくると思います。

作者にそれだけの技量があればの話ですが…

感想、

御指導など受け付けておりますのでよろしくお願いします。

第四話 放課後（前書き）

一つ前の「昼休み2」は第四話ではなく第三話でした。混乱された方がおられましたすみませんでした。

第四話 放課後

まいった…

まさかあのまま日陰に入って寝てしまうとは…

気が付いたのは、ほとんど六時間目が終わる頃、つまり五・六時間目を完璧にさぼってしまったというわけだ…

まあさぼってしまったのは仕方がない。

荷物を取りに教室に向かうでしょう。

青かった空は、いつのまにか灰色に曇ってしまい、日がまったく射さなくなっていた。

昼間の暑さが嘘のように秋から冬に向かう風が校庭の砂を巻き上げて舞っていた。

キーン コーン カーン コーン…

六時間目終了のチャイムと同時に辺りが騒がしくなる。

これから部活に向かうもの、帰るもの、遊ぶもの、塾に行くもの、その他もろもろの人間が思い思いの準備をしているのがわかる。

ばれないように静かに自分の教室間で近づいていく。

ちょうどHRが終わるころか・・・みんなが帰り始めたら知らん顔して中に入ってさっと荷物を持ってとっと帰ろう。

しばらくして挨拶が聞こえてから、俺は後ろ側から教室に入ろうとして固まった。

「……………」

「……………」

「……………」

「いよいよどうした?」

・・・担任が後ろから出てきたのだ。

「・・・なんで、こっち側から出てきたんですか？」

担任は考えている風に顎の髭をさすりながら

「ん？」

とても言いそうな顔をして立っていた。

「担任は後ろから出てはいけないのか？」

―棒読みだ…感情がこもっていない…大根役者め…最初からタイミングを見計らってたな…。

「いや、別に…」

こいつが担当する演劇部に同情しながら教室の奥を見る。

堂々と無人の机に乗っているカバンが目についた。

担任は何か小言を言っているが無視する。

「それじゃ、失礼します」

脇を通りすぎて行こうとしたとき。

「まあ待てよ」

腕を捕まれて足を止める。

「なんですか？」

早く帰りたい俺は不機嫌そうに返答する…というか、寝起きで不機嫌だ。

これがためだったら二、三発殴って黙らせるんだが…（もちろん軽く）

「なに、用って程のことじゃないんだがな」

…なら呼び止めるな。

「おまえ午後の授業さぼったろ」

…む？なぜもう知ってるんだ？今日一晩言い訳を考えようと思ったのに。

「田村先生が嘆いてたぞ」

田村っていうのは数学の教師なことだ。

「生徒が一割しかないって」

一割って…一クラス40人だから…四人！？

「で？おまえは何をしてたんだ？」

どうする？おとなしく日陰の中で休んでましたというべきか？それとも嘘をつくべきか？

「…」

「ん？」

「…」

「ふう…」やれやれ、とでも言いたそうな顔をむけて

「日陰で寝てました」とは言えないよなあ」

…知ってたのか…人が悪い…

近くにいたやつが笑っている。

「一言田村先生に謝ってから帰れよ」

担任はそついうと教室を出ていった。

五分後俺は真つすぐ駐輪所にむかつていった。

蝉の声もいつのまにか消えて静かな秋らしい雰囲気を感じながら帰り道、自転車走らせた。

第四話 放課後（後書き）

久々の更新いやいや長かった書くまでが。さて、まったく本題に入
っていきません…本当はこの話のタイトルは「遭遇」になるはず
が…まとめきれずに「放課後」になってしまいました。これからさ
きどうなるんだろ…

宴

飛び出す血、血、血……

首もとに嚙り付く鋭い歯。

どことなく茫然とする眼

流れては土にしみ込む血

腹を刺されて倒れている人、人、人……

す、す、す...

血を啜る音音音…

ずるずるずるずる……男だか女だかわからないがシルエットが血の海からのそりと起き上がった。

一瞬辺りが光り、次の瞬間には血の海は消えていた。

あとに残されたのは体液のなくなった干物のみ。

[illegible]

それは月を見上げにいつと口を釣り上げて笑みを浮かべた。

一筋口元から血がたれる。

一人きりの宴

命を食らう宴

獲物の獲得を祝う宴

彼の名は

「魂喰い」

人間の魂を食らい永遠を生きるもの。

カレノナハ、タマシイクイ

エイエンヲ、イキルモノ
：

宴（後書き）

知り合いがら生の感想をいただきました。「内容が気持ち悪い」だ
そうです。　　そうなんですかね？よくわからないんですが。まあ、
なんていわれてもこのままではいきます。
これからよろしくおねがいします。

第六話 放課後2

くそ…腹減った…

結局相川を捕まえられず、パン20枚分のパンの耳で昼を耐えぬいた。

六時間目の田村の授業はまったく聞いていない。

聞く必要もない。

教わる気もない。

…教え方へたなんだよな。

今教室にいるのは四、五人てところか…

みんな思い思いの場所に遊びにいつている。

俺が残っているのは、成績のためというより、先生が可哀相だからだ。

…で、当の先生は、さっきから教科書の問題で詰まっている。

…三十分も…

何で教師が教科書の問題を解けないんだ？

…いいのか？そんなので給料もらつといて？

そうこうしているうちにチャイムがなり、担任と田村が入れ違いざ

まに一言二言会話しているのが見えた。

担任も教壇について生徒を見回すなり、がっくりと肩を落とした。

やっぱこの現状はシヨックか。

それでもHRをするのはさすがというかなんというか…

まあそんな大した連絡はなく、あいさつをして帰宅する。

俺はさつさと前のドアから教室をでて駐輪所に向かう。

誰かが担任に捕まっているように見えたが、誰だったんだろう…

気にせずそのまま帰宅したら何をしようかと考えながら自転車に乗り校門を出た。

第七話 帰宅

九月の終わりとはいえ、まだそれなりに日が長く、たいして太陽も傾いていない。

のんびりと自転車を走らせる。

一人でいたかった。

ただ、ゆつくりと帰りたいかった。

——！！！！

後ろを振り向く…何もいない…

- - ! ! ! ! !

また…何かに見られている気がして辺りを見回す。

しかし、流れる車以外に人の気配はない…

気のせい…だな。

自分にそう言い聞かせ、帰り道を急ぐ。

ただその場所に留まりたくはなかった。

一刻も早く帰りたくなった。

——同刻——

ぴぴぴ…ぴぴぴ…

ヴヴヴヴヴ…

—うおう！？

いきなりケツに何かの振動が来る…！

—なんだ携帯か…

携帯のバイブレーションにびびってしまった自分が情けなく思えた…

—初心者め…

自分で自分を罵る

余計に虚しくなった…

着信履歴はクラスメイトからだった。

「斎藤 涼」

確か今日は休んでたはずだが…

「もしもし？」

『よかった繋がった』

ぼそぼそとした声だ。

「よお、どうした？」

『いや、なんか暇だったから』

「さぼりかあ？」

『ちょっと気分が悪くてさ…』

明らかに元気がない。

「風邪か？」

『たぶんね』

ごほごほっという音が聞こえてくる。

「大丈夫か？」

『…………』

沈黙…

「おい？…おい！もしもし！？」

携帯からは何の音も聞こえてこない。

何かあったのか？

この場合どうするんだ？

救急車か？救急車って何番だ？

119？110？114？市外局番はいるのか？

（どとどとどどうしよう…）

ぼんつと肩に何かが乗った。

「う@（□；）！！」

声にならない声を上げてしまった…

振り向くとそこに、マスクをした斎藤がいた。

「いよっ」

反射的に右ストレートを打ち込む。

笑いながら避ける斎藤。

笑っている。

笑っている。

笑っている。

「さっきの声…」

言いかけて腹を押さえて笑っている。

「ちよつとそこら…ん…ではな…いか？」

今度はむせている。

むせたり笑ったり忙しい奴だな…
むせている斎藤が落ち着くのをまって近くの公園にすることにした。

第七話 帰宅（後書き）

いつになったら物語が動き出すのでしょうか？
らいからはちゃんとできるだろうか…
感想お待ちします。

次話ぐ
例によつて

第8話 公園

先ほど感じた悪寒はもう感じない。
なんだったのだろうか？

誰か恨みがあるやつとか？

…心当たりは、無い。

考え事をしていたためだろうか？

「……………おお？」

いつのまにかかなり方向を間違えて来ていた様だ。
自動公園の近くで我に返る。

たいして大きくない公園だが、春には桜が満開になって薄桃色の吹雪が起こる。

桜を

「キレイ」

だと思ったことはなかったが、その時期に通りがかかるとついつい足を止めてしまう。

普段は小学生やら幼稚園児たちが遊んでいるのだが、今日に限っては誰もいない。

いるのは俺と同じ年ぐらいの男が二人いるぐらい。

制服を片方は着ているが、どこの高校だかわからない。

…特にやることもないな。

紅葉せずまったく秋らしくない公園から再び来た道に戻る。

「…風邪、平気か？」

隣で

「あゝ」

とか

「うゝ」

とかいいながら鼻をすすっている斎藤が気になる。

…かなりきつそうなんだが

本人は

「平気、平気」

と言っているので平気なんだろうが…

「なんか、学校で休んだこといつてた？」

「いや？特に…連絡したのか？」

「いいや」

と首を振って答えるが、そのままふらつく。

…大丈夫なんだろうか？

「熱はないのか？」

「ずいぶん下がったから平気だろ」

そうは見えないんだって…

「今何度？」

「さっきはかったら40度」

「寝ろ」

何を考えてるんだこいつは…

「平熱37だから大したことないって」

簡単に言う…

「40…普通動けないだろ」

「40は平気、それ越えるときつい」

40の上とな？…それは41度とかですか？

「最初何度だった？」

「42度」

一瞬風が公園に吹いた。

サアアアア…

ざわめきが公園を支配する。

「ふおおおお…」

うめき声に振り向くとそこには、遠くに後退りした斎藤が…どうやら、今の風で流されたらしい。

…やっぱ馬鹿だ…

くそ！なんだこの貧弱な体は！？

なぜ風などに流される！？獲物は目の前だ！

一度首筋に噛み付けばそれでおわる！

それなのに、ふらふらするわ、力は入らないわ、なんなのだ！
獲物が何か言っている。

見舞い代わりにジューズをおごるだと…？

くく…もうこの体の持ち主の真似をする必要はないな。
後ろを向いたら噛み付いてやる…

右手の甲が軽く光を放ち、みるみるうちに犬歯が鋭くなり牙となった。

手足も血管が浮き出るほど太く大きく発達している。

一瞬、体に

「ため」

をつくり、一気に放つ。

獲物まで一飛で一瞬で辿り着き口を開ける。

がぼ

…がぼ？

なんだ？口に何かが入っている。
冷たい。

「あが…こ…おお？」

硬い

獲物が振り向き、表情を固める。

…

…

…

「…ぶ！」

いきなり笑いだしている。

こいつ…狙ってやったのか？

げらげらと笑っているそいつは、

「そんだけ元気なら大丈夫だな」

と言って肩を叩いている。

再び風が吹いてくる。

風にのって子供の声が聞こえてきた。

…人が増えてきたか。

今日は

「狩り」

はやめておくか。

目の前の獲物に

「もう帰るから」

と言って公園を出た。

なんか、急に元気になったな斎藤…

口に缶がはまつてるのみたときは何かと思ったけど、おもしろかったな。

子連れの夫婦やら爺さん達が来て公園が騒がしくなった。

「俺も帰るか」

誰にいうでもなくぼそりと呟き、自転車にまたがった。

まだ、公園に秋の気配はない…

第8話 公園（後書き）

なんか、片方の主人公ほったらかしですね… どう

しょう… さて、怪しい人も出てきたこと

で、やっとお話が動きそうです。 何

せ初めての物書きなんで矛盾とかがあったら教えてください。

なおしょうがないくらいすごい矛盾は素

直に謝りますので。 では、

次話をお楽しみに

第9話 帰宅（前書き）

久々の更新です。いやはや連載って大変ですね。楽しいけど。それでは本編をどうぞ。

第9話 帰宅

「……」

無言で玄関に入る。

むせ返りそうになる血の匂い。

居間のカーペットは黒く変色し、固まっていた。

ソファーには人が腰掛けている。人は動かない。

「……」

じつと見つめると、人はのろのろと立ち上がり、こちらを見る。

「お帰り」

唯一言そういつて再び動きが止まる。

よく見ればその人の体は機械の溶接のような跡がいくつもあった。

首に一つ両手足の見える部分で五つ以上……継ぎ接ぎだらけの――ヒト

いや、人形と言ったほうがいいかもしれない。

動かなくなった人形から目を離して、血の絨毯がひかれた階段を昇

つていき、以前自分の部屋だった場所に入る。

「ククク……」

知らず知らずに笑いが漏れる。

全くこの国は危機感というものが無い。

獲物がうようよしているではないか！ベッドに座り、過去のアルバ

ムを取り出して、獲物を物色する。

次はどいつの血を吸ってやるのか……公園で斎藤と別れた後、そこら

辺の本屋で、立ち読みをしていた。

特にやることもなく、パラパラとページをめくるだけ。

特に読みたいという本もない。

漫画は好きな方だと思うが、読む気は今はしない。

完全な時間つぶしだ。

……っといつてもこの後予定があるわけでもないが……なんとなく本を読むよりも、客層を眺めている。

成人誌のところでサラリーマン（中年か）？が、立ち読みをしている。

参考書のところでは、高校生だか予備校生だが、参考書を見比べている。

小さな子供が絵本の前で駄々をこねていた。

ヴヴヴヴヴ...

ポケットから携帯の振動が伝わってくる。

「はい？なんでしょ？」

通話ボタンを押して会話をしようとした。

道を間違えて公園に行ってしまったせいで、家に着いた頃には日がかなり傾いてしまっていた。

「ただいまぁ.....」

疲れたため、力なく呟いて靴を脱ぐ。

「お帰り。電話が来てるよ」

開口一番に母に言われ、居間の受話器を取る。

「もしもし？」

「よお、俺だけど」

「相川か？」

「そ、相川です」

相手は同じクラスの相川樹だった。

「なにか？」

「斎藤の葬式いつか聞いたか？」

「…いや、何も」

少しトーンが低くなってしまった。

「明後日の日曜にやるらしいよ。一時ごろらしいから」

どうやらホームルームで伝達されたようだ。

「わかった…覚えとくよ」

「よろすくな…そのことを遅刻魔にも教えてやってくれ」

「連絡網か何か？」

「そんな感じ」

「わかった」

「ほんじゃよろしく」

受話器を戻してため息を吐く。

携帯を出して『遅刻魔』に連絡をすることにした。

トゥルルルル…

トゥルルルル…

トゥルルルル…

「はい？なんでしょ？」

少し騒がしい雑音が聞こえる。

「ああ、斎藤のことなんだけどさ…」

第9話 帰宅（後書き）

いつのまにか200人以上の方に呼んでもらい嬉しいかぎりです。というわけで次のお話は番外編をやりたいなーって思ってます。たぶん別に小説を立ち上げてやると思います。人物紹介もかねて。では、また（＾Ｏ＾）ノシ

第10話 矛盾（前書き）

二夜連続投稿！勢いに任せて書いてしまいましたw

第10話 矛盾

「斎藤の葬式明後日の1時ごろだつてさ」

本屋で受け取った電話は、信じがたいものだった。

「斎藤？」

聞き返す。『そう』と軽く返す相手。

「斎藤涼？」

相変わらず『そう』と言う返事が返ってくる。

「おまえ今日遅刻したろ？」

「確かに今日も」

「重役出勤」

を敢行した。

「した…けど…」

口が渴く。

頭の中がぐちゃぐちゃになる。ふうつと向こう側で息を吐く声がした。

「最近流行ってる通り魔があるだろ？」

「トオリマ？」

「斎藤があれにあったらしくつてさ、俺も今日知ったよ」

「トオリマにサイトウが…？」

「嘘…だよな？」

「…」

ほんの少しの沈黙が長く感じるとはこのことを言うのだろうか？ 喧騒が聞こえなくなり、心臓の音と呼吸の音が嘘みたいによく聞こえる。

「…本当だ」

「…」

ことが無かった。いや、現実逃避をしていた。頭の中で

「今日の晩飯何かな」

なんて考えてる自分がいた。

今日の出来事が一瞬頭の中をよぎる。

斎藤が死んだ？休んでたんじゃなかったのか？じゃあ、あれは…？

「おい、どうした？」

携帯はまだ繋がったままだった。現実に戻される。

「おい、今すぐこれるか？」

「どうした？」

――斎藤はいきている。今日会ったんだ！

「線香を上げたいから斎藤の家を教えてください」

口からは違う言葉が出た。

「…」

しばしの沈黙のあと、

「わかった今どこだ？」

と返事が来た。

「駅前の本屋」

「すぐ行くよ」

速答だった。

そこで携帯を切り、着信履歴を見た。

4 : 5 0

斎藤涼

着信アリ

「すぐ行くよ」

通話を切って居間に顔を出し、

「ちょっと出掛けてくる」

夕飯の支度をしていた母にそれだけ言って玄関に向かった。

「どこに？」

「斎藤の家」

少し間があってから。

「斎藤ってあの…」

―通り魔にあつた？と言いたいのだろうが、

「そう」

と、言葉を遮った。

「線香を上げに行ってくる」

靴ひもを結びながら答える。おそらく遺体と顔を合わせることはないだろう。

昼の担任との会話を思い出す。

―胸に穴が開いていたらしい。

それに、噂の吸血鬼のせいなら、噂どおり体は血が抜かれて干物になっているかもしれない。

「んじゃ、行つてきます」

「迷惑かけないようにね」

声を聞きながら玄関から出る。

秋らしい少し冷たい風が頬をなでる。

日は暮れていた。

自転車のライトを付けて、待ち合わせの本屋に向かう。

しばらく自転車を走らせて、目的の本屋に着いた。

外に学ランを着たやつがいる。

「よっ」

軽く手を挙げてあいさつする。

向うも気付いて携帯から顔を挙げた。

自転車にまたがり、無言で俺の後をついてくる。
ただ黙々とペダルを漕ぐ。

「…なあ」

沈黙を破る声。

「ん？」

「どのくらいかかる？」

「四、五分じゃないかな？」

「そうか…」

とだけ言ってまた黙る。

しばらくして、今日間違えて来た公園前を通る。

「ここを曲がればすぐだから」

後ろに付いてきてるか確かめるついでに説明して振り向く。

「……」

止まってポケットを探っている。

「…どうした？」

「ちょっと待って」

携帯を取り出して、画面を俺に見せる。
着信履歴画面のようだ。

「…？」

普通の履歴のようだが…？相川 樹 上田 聡

上村 雅樹 斎藤 涼

「これがなんだっていうんだ？」

クラスの名前が出ている。

…ちょっと待て…

相川 上田 上村の三人はわかるとして、
なんで斎藤の携帯から今日着信があるんだ？
顔を上げると公園を見ていた。

「今日斎藤にここで話をした」

…なんだと？

「ここって公園で？」

うなずく。

「まさか」

と、一笑したかったが、着信履歴が現実を物語る。

背筋を何か冷たいものが伝わっていくような気がした。

「とりあえず行ってみよう」

すぐ目の前の家に行けばすべてがわかる気がして、玄関に向かって
いった。

第10話 矛盾（後書き）

なんか、話にムチャクチャ無理が出てきたような…「絶対ここおかしいだろ」なところがあつたら教えてください。叱咤激励でもお待ちしております。では

第11話 遭遇（前書き）

今までのより少し長い程度になりました。文章と文章の間が空くのは、視点が代わった（主人公が代わった）という目印です。

第11話 遭遇

ピンポーン…ピンポーン
玄関のチャイムは虚しく響く。

明かりは点いている。

だが、物音がしない。

「いないのか？」

「明かりが点いてるだろ」

明かりが点いていて物音がしない状況…

「寝てるとか？」

「…だといけどな」

― 同感。

ただ寝ているだけならチャイムを数回鳴らして呼び出せばいいだけのことだ。

ピンポン……

家のなかに虚しく響く。

鍵は開いているのだろうか？

ふと、玄関に手を掛けてみる。

――開かなければそれでよし、そのまま帰ろう。

「……」

かちゃ……あつ……開いた……いとも簡単にドアは開いた。

後ろで息をのむ音が聞こえた。

予想できなかったのだろうか？――うわうわっわ、開いちゃったよ、どうするよ？。

ゆっくりと開いた隙間から何だか匂いがした。

生臭いとゆうか、鉄っぽいというか？――鉄っぽいつてなんだ？自分につっこむ。

あまり考えたくないものが頭に上った。

「お邪魔しまーす……」

といいながらおっかなびっくり上がり込む。……？

本当に留守なのか？

「お邪魔しまーす！」

大きな声でも、反応がない。

さすがにこれ以上勝手に上がり込むのは悪い気がする。

オレ達は、しばらく玄関で返事を待っていた。

「……」

「……誰も居ないみたいだな」

ぼつりと言って、

「帰ろう」

と言おうとした――

『お帰り』

「！！！」

「お！ × ↓（「□」；）！！」

――やべ、とんでもない声が出た。

自分の声に驚いた。

確実に人の聞こえる周波数は軽く越えたな……

その声に驚いたのは俺たちだけで、他に驚いた様子の音や気配が聞こえない。

声のしたほうは、誰も動く様子がない。

顔を見合わせて渋々上がり込む。

誰がいることはわかった。

「お邪魔します」

と一言加えて上がり込む。

目の前に黒い絨毯を引いた階段。

声のした部屋は、障子で隔たれている。

障子に手を掛ける。

――開けないで帰ったほうがいいんじゃないか？

――ここから先はみちやいけないんじゃない？

頭の思考がまとまらない。

一つ深く息をついて、素早く開けた。

そこは居間らしく、テレビやコタツなどがあつた。

椅子のうえに腰掛ける人影がある。

「あの…」

返事がの代わりにゆっくりと首が回ってきた。

「なんだ、人がいるじゃないか。」

障子を開けた先にいた人は、こちらに背を向けて椅子に腰掛けていた。

「あの…」

という呼び掛けに反応しない。

「返事が無い、ただの屍のようだ。」

頭に浮かんだ言葉を飲み込んだ時。

ゆっくりと首がこちら側をむいた。

意外と体がやわらかいらしく、首だけを真後ろに向けている。

「人間の首ってそんなに回ったっけ？」

せいぜい稼働限界が90度だと思っていたが、軽く180度回った。

『お帰り』

同じ言葉を言う。

そのまま180度をこえて回りだす。――360度回っちゃったよ…

それでも回る。

回る。

回り続ける。

ぶち…ぶちぶちぶち…

こと…

落ちた…

頭は回転しながら体から落ちて、こちら側に転がってくる。
血は流れていない。

―人形か？

もしそうだとしたらかなり趣味が悪い。

首が回転してしかも

「もげる」

なんて見た目が最悪だ。

―斎藤はこんなのが趣味なのか？

脅かした腹いせに蹴りたくなるが、生々しすぎてやめた。

がちや…

「！」

「！」

いきなりドアの開く音、部屋の臭気が増した気がした。
玄関に立っていたのは―

「斎藤…」

死んだはずの

「斎藤涼」

だった…

第12話 吸血鬼

「斎藤…」

玄関に立っていたのは確かに

「斎藤涼」

だった。

が、明らかに二人が知っている

「斎藤涼」

ではなかった。

姿は今までどうり華奢な体なのだが、昼間着ていた服の所々が黒く変色していた。

そして、右手にはサッカーボール大の何かを掴んでいる。

「…」

動けずにいる二人を交互に見回して、右手を振りかぶるような動作をする。

ぴきぴきぴき…

氷が急速に固まるような音を立てながら右腕が膨張していく…

—ゾクッ—

二人はほぼ同時に後ろに下がっていた。

考えての行動ではない。

身の危険を感じたのだ。

『何かやばい!』と。

斎藤の右腕は本の二倍以上膨張している。

血管は浮き出て、コードのように腕を張っている。

「おわあ!」

一人が何かを踏ん付けてこけると、斎藤の右腕が振られるのはほ

ば同時だった。

ヒュ…ぱあん！

立っていた位置に何かが猛スピードで投げ込まれ、踏ん付けて蹴り上げたものもろとも壁に叩きつけた。

「…」

言葉が出ず、ただ音のしたほうをみる。

そこには真っ赤な花が壁に咲いていた。

たった今咲いたのだ。

証拠にまだ瑞々しい。

そう、今投げ込まれた

「何か」

が弾け飛んで

「咲いた」

のだ。

斎藤のほうはさっきまで膨らんでいた腕が元に戻り逆に血を流していた。

二人はじつと花のほうをみていた。

花から雫が壁ずたいにゆっくりと垂れて

「種」

のところまで垂れた。

種にはたくさん毛があった。

長くて、一本一本はだいぶ細い。

根にしてはかなり貧相なように見える。

「う…」

うめき声が聞こえる。

「種」

に気付いたのだ。

「うう…」

声は二人から発していた。

弾けたのは、

サッカーボール大で、黒い根がついていて、弾けると赤い液体等が飛び散り、固い破片があつて…

それは、人の頭だった。

液体が瑞々しい花を咲かせていた。

「うえお…」

悲鳴をやつと飲み込む。

逆流する胃液を飲み下す。

喉が焼ける。

そして気付いた。

―家に充満していた匂いは…

…血だった。

斎藤は二人のその様を無表情で眺めている。

顔を斎藤に向けた二人の表情は引きつっていた。

「二人とも何でいるの？」

何事もなかったような台詞でさえ二人を脅かすのには十分だった。

「っ！…」

言葉にできないというように口をばくばくさせる。

「ばくばく」

と言つても、閉じることはできず、半開きのままなのだが。

「今さあ…」

普段道理に話す斎藤。

「飯食ってきたばっかなんだよね」

満足気に笑う。

「そしたら二人がいるんだもん」

「とっさにもってるもの投げちゃったよ」
と、笑いながら言う。「今日はご馳走だあ」

斎藤は彼らを食料としてしかみていない。

「…んで…」

小さな声が聞こえた。

「ん？」

食事を目前にしたためか、顔がほころんでいる。

「死んだはずじゃ？」

やっと聞き取れるほどのかぼそい声。
普段の様子とはかけ離れた恐怖の表情も食欲をそそるスパイス以外のなにものでもなかった。

満足気にうなずきながら、

「死んだよ」

と簡潔に答える。

死に行くものへの慈悲だろうか？
食欲による興奮だろうか？

冗舌になりつつあるようだ。

「斎藤涼と言う人物は死んだ」

二人の表情を眺める。

「今ここにいるのは、『斎藤涼』という入れ物にいるのが僕さ」

ぽかんと口を開けている。

「一連の吸血鬼騒ぎの犯人も僕だ」

びくつと二人のからだが硬直する。

「そう、僕は『斎藤涼』であり、『吸血鬼』と言っわけだ」

ゆっくり後退りしているのを気付いていない。

自称吸血鬼は、軽く手で顔を覆った。

次の瞬間

「斎藤涼」

の顔はなくなり、女の顔があらわれた。「この顔は30年前に喰った奴の顔」

また顔を覆った。

「これは100年前」

年をとった老人の顔だった。

声もしわがれたものになっている。

顔を元に戻し、ゆっくりと近づいてくる。

一步一步

：

また一步

二人もやっこの思いで下がる。

鼻歌を歌いながら二人を見比べている。

「どちらを先に食らおうか。

そんな考えが伝わってくる。

：

…

…

二人の視界からいきなり消えて真横まで飛んできた。

「うう…」

後退りしようにも後が無い。

顔はすでに斎藤涼の顔ではなかった。

しわがれた老人のような顔になっていた。

「う…う…うわああああ！」

秋の夜に絶叫がこだまする。

第12話 吸血鬼（後書き）

最近ゲーセンに時々行ってます。久々にアヴァロンの鍵をプレイしてまたやりたくなってしまいました。1プレイ300円は高い…（・・；）

第13話 夜の逃走

「う……うわああああ！」

近づいてきたそいつが反対をむいた瞬間、思いっきり殴り付けた。バキィ！と固い音がして数歩後ずさる。

手応えはあった。

期待はできないが、少しは効いているはずだ。

拳が少し痛む。そいつは仰け反った体を戻した。

「なかなかいいパンチだな」

「効いてない！？」

「生きがいいのはいいことだ」

一人うんうん頷いてこちらを見ていた。

「……っらあ！」

突然そいつの体が宙に浮いた。

そして、さっき人の頭が弾けたところに倒れこむ。

恐くて体が動かなかった。

ただ震えているだけだったが、仰け反ったのをみて体の震えは止まった。

今できること、——こいつから逃げること！

「……っらあ！」

反対をむいた瞬間に突き飛ばす。体は、もう、動く！

「逃げるぞ！」

頷くのを確認して玄関に走った。

——頭の中がぐるぐるする。

斎藤は死んでいた。

それどころか通り魔だった。

でもそれは斎藤じゃなくて。

——誰だろう？ 玄関を出て、公園に入る。

街灯のおかげで、すでに暗闇に飲み込まれている時間だが、よく見

渡せる。

「あ…ああ…」

声にならない。

街灯の下には人がいた。

ゆっくり近づいてくる。

その顔は知っている顔。

たった今逃げてきた顔。

すぐに公園から逃げ出す。

全力で走って、振り切れるものなら振り切りたかった。

走る、走る、走る。

はあ、はあ、はあ。

息が切れても走る。

――昼間にあつた斎藤は今の奴だったのか？――斎藤を殺したのはあいつだ！公園から飛び出して走りながら、昼のことを思い出す。

――あいつは風邪をひいてるって言ってたな。体調がすぐれなかったのは確かだと思う。頭で考えずにがむしゃらに走っていた。

「…！」

先回りされている…。

「もうあきらめなよ」

少年の顔をしたそいつは言う。

どうやって追い付かれたか、彼らは想像できないだろう。

ぜえぜえぜえ… 荒い呼吸が聞こえてくる。

呼吸が整うまで待ってから、再び声をかける。

「逃げられないよ」

――くそ！いつのまに先回りしてるんだ！

息一つ乱さず目の前に涼しげに立っているやつを睨み付ける。

にやにやしながら近づいてくる。

急に視界が明るくなった。

懐中電灯の明かりが三人を照らしたのだ。

光の持ち主は近くの駐在所からきた警官のようだった。

のほほんとした顔の警官は三人の顔を順番に見て、ゆっくりと口を開いた。

「ちよつといいかな？」

最近多発している通り魔のための職務質問。

面倒だが、仕事だ。

彼はいつもどおり手帳を取り出した。

名前と職業と何をしてたかぐらいか…みたところ高校生だろう。

「はい、じゃあ名前を教えてくださいるかな？」

—…警官だ。

職務質問をするつもりらしく、手帳とペンを取り出した。

歳は25〜30ぐらいだろうか？俺たち三人は立ち止まり、突然の乱入者に安堵と驚きを抱いていた。

警官は斎藤から質問を始めるようだった。

—どうする？どうやってこれから逃げる？頭は混乱の極みに達していた。

—あかさたなはまやらわあああああ！何度も頭の中で絶叫する。できれば実際に叫びたいところだが、さすがにそれはまずいと思う…と斎藤の顔をしたそいつが、戸惑った顔をしたのが目についた。

ぷしゅううう…と音を立てて頭が一気に冷静になっていくような気がした。

『斎藤は死んでいる』この事実避けられないことだ。いくら同じ姿をしようとして、

「斎藤涼という人物は死んでいる」

のだ。逃げるチャンスは一瞬。

「すいません、ちょっと電話していいですか？」

そういつて警官から離れる。

通話はせずに携帯のメールホルダを開きメールを送る。

ヴヴヴヴ…メールの着信を告げるバイブレーションが尻に響く。

『斎藤が名前を教えたらかっちに逃げる』とだけ書いてあった。

すぐに差出人をみる。

―何？どゆこと？聞きたいことは有るが今は逃げるのが先決だ。二人の質問に聞き耳を立てる。

「すぐおわるから、名前を教えてくださいかな？」

「あ、…ええつと…」

少しとまどいながら、

「斎藤涼です」

と確かに言った。

すぐに差出人のほうを見る。

頷いた。―今か！ゆっくりその場から離れて…駆け出す！そいつも駆け出す。警官が気付いた様子はない。一気にその場から脱出した。

第13話 夜の逃走（後書き）

やっぱこの小説血生ぐさいそうです…まあ、明るくはないですけど
…狙いどおりってことで良いのかな？ 不安だ…

第14話 夜の逃走2

―職務質問をしていたら、他の二人が逃げ出したのに気が付いたのは答えていた少年が驚きの声を上げてからだった。

答えていた少年 斎藤涼 は、ほっそりとしたひ弱そうな印象を受ける。

振り向いたがすでに二人の姿はなく、仕方なく彼に名前を聞くことにした。

「今の二人は友達かな？」

逃げた二人の方向を見ていた男は振り向くとそう聞いてきた。

「…いえ、違います」

嘘をつく。

間違えても、そうです。等とは答えられない。

確かに自分は斎藤涼だが、本当の名前は違うし、斎藤涼の記憶があるわけではない。

「喰う」

といっても

「複写」

ではないのだ。

なりきることはできない

顔が変えられるのは一種のカモフラージュにすぎない。

―が、今は斎藤涼で押し通さなくてはならない。

男は少し悩んでいるらしくメモ帳に視線を落として止まっている。

二人はもう追い付けないほど逃げているだろう。

たとえ誰に助けを求めても、相手にはされないはずだ。
―後はこの男をどうするか。
ゆつくりと男に近づいていき―

「―…ん？」

警官は顔を上げた。

少し暗くなってきた蛍光灯の明かりが目刺さる。

目を細めながら辺りを見回す。

いつもの駐在所である。

「ああ――… あ？」

いつのまにか机に突っ伏して寝てしまったらしい。
日誌の記入中らしく、見事真ん中によろつとした線が描かれていた。

（やつちまった…）

仕方なく修正液で上書きしておく。

―あれ？俺こんなどこにいたっけ？

まだ夢の中にいるような感覚の警官は大きくあくびをして、伸びをした。

「んん…ふう」

体をもどしてから

「夢だな夢」

と呟いて日誌に目を落とした。

その首筋には穴が二つ開いており、びくんびくん、と脈打っていた。
駐在所をのぞいていた影は、その様子をみてその場を離れた。

気付いている様子が無いが、警官にはすでに
「自我」

が無くなっていた。

いままで生きていたことを反復しているだけで、実際は何も考えていない。

影の主―斎藤涼は、ゆっくりとその場を離れた。

―まあ、手駒が増えただけよしとするか。

かれはにいつと口を引きつらせて笑った。

元の斎藤涼からは想像もできないような歪んだ笑みだった。

「おつてこないか…」

息を切らして、逃げてきたがいつのまにか追ってくる様子がなくなり、足を止める。

ぜひい、ぜひい、ぜひい…喉がカラカラに乾き、口のなかは変な味がする。

さっきまで全力で走っていたため体が酸素と水分を要求している。壁に寄り掛かり、体を休めてお互いに息を整える。

「ゆめ…じゃ、な…いよ、な？」

「…」

ぶはあ、ぶはあ、ぶはあ…

問われたほうは、答えずに息を整えている。

「…なん…と…かいえ…よ」

呼吸の合間合間に話すため、ときれときれになる。

「…たぶん」

息を整えてなんとかそれだけ言い、ずるずると座りこんだ。

「…」

「…」

お互いに何も言わずただ黙り込んだ。

頭の中が混乱して、どこをどう考えたらいいのかわからなくなっていた。

多分、見てはいけないものを見たことは理解できた。

酸素が行き渡りすつきりした脳で考えても何もわからない。

警察に通報するのが一番なのだろうが、どのように通報すれば良いかわからない。

―通り魔に襲われました……？

果たして信じるだろうか？

犯人は顔が変わります……と言っても？

ただのイタズラとして扱われるのでは？

この町で多分顔を知っているのは俺たち二人だけだろう。

あそこまでおつてきたやつが今までの獲物を始末しなかったとは思えない。

―恐らく、確実にもう一度俺たちの前に現れるだろう……

「いったん帰ろう……」

「そうだな」と、声が返ってきて再び俺たちは歩き出した。

第14話 夜の逃走2（後書き）

初めてp cでかいて、読み直しをしました。

改行がうまくいってないことに絶望・・・

p cで読んでも皆さん申し訳ありませんでした・・・

これからはp cで書き込む事が多くなると思うので、少しは読みやすくなると思います。

第15話 翌日・SAIDE;A(前書き)

思い切って書き方を変えてみました。

・・・まあ下手なんですがね、どのみち・・・W

どう変わったかは本文をどうぞ

第15話 翌日・SAIDE；A

どんなことが起きても今日は終り、どんなことが起きても明日が来る。

斎藤の家から逃げ出した後、二人それぞれの家路に戻った。
すぐに布団に入った。

今日の出来事がどうか夢でありますように・・・
祈りながら夜を過ごした。

今日が終われば、明日が今日になり、今日は昨日になる。

今日が明日になるのではない。

明日が今日になるのだ。

S O U L E A T E R 第15話 - 翌日・・・SAIDE：A -

・
・
・
・
・
・

朝日が目に染みるような気がする。

結局一睡もできなかった。

ずっと布団をかぶっていたために、朝になっているのには気がつか
なかった。

家についてから食事も喉を通らず、すぐに布団に入ってしまった。
寝たかった。

寝れば何もかも忘れられると思った。

布団を被ったまま10時間近く経過してしまったのだ。
時刻は七時半・・・学校に出発するにはまだ時間があった。

「行つてきます・・・」

力なく玄関のドアを開き、自転車に乗ろうとして自転車がないことに気がついた。

ああ、そうだ。斎藤の家に忘れてきたんだ・・・

幸いいつもより早く家を出る準備ができていたのでたまには徒歩も良いと思い歩くことにする。

大分秋らしく色づいた木々をみかけた。

銀杏、紅葉・・・あと色々。

いつもの自転車では気がつかない変化だった。

いくら歩いても気が晴れなかった。

まだ鼻腔をあの家に充滿していた臭いがくすぐっているような気がする。

あの、生々しく鉄のような臭いがする・・・気がした・・・

気のせいだ。

自分に言い聞かせて先を急ぐ。

駐在所の前を通り過ぎたとき、昨夜の警官と目が合った。

無事だったのか。

何故か安心した。

軽く、会釈をすると向こうも返してくれた。

少し、気が軽くなった気がした。

校門の前にやっと着く。

今日も変わらない一日が始まるのだろうか・・・？

いや、今日こそいつもと変わらない一日であって欲しい・・・
そう思って校門の中に進む。

キンコンカーン・・・コン・・・

教室についてころ、鐘の音を模した電子音が声高らかに時刻を知らせる鐘を鳴らした。

席についた時刻は八時半。

ホームルーム開始まで十分あった。

ずっと目の前が一瞬暗くなった。

反射的にまぶたを開ける。

そんなことを二度、三度繰り返して意識はぶつとりと切れた・・・

第15話 翌日・SAIDE・A（後書き）

いかがでしょうか？

本当はいきなり書き方を変えるべきじゃないのかもしれませんが、

話のほうも一日たったわけですし大目に見てやってください・・・

・

感想お待ちしております。

第15話 翌日SIDE B

頭の中がぐるぐるする……

寝付けないまま朝を迎えた。

首が回って落ちた人……

異臭だらけの家……

豹変した知り合い……

俺を取り巻く世界が一瞬で崩壊した。

……ぴぴぴ……ぴぴぴ……

SOUL EATER 第15話……翌日：SIDE B

いつのまにか目覚ましが鳴っている。

朝がきた……。

結局一睡もせずに学校に行くことになりそうだ。

頭は眠気を感じていない。

——むしろ昨日のことが夢のような気がする。

いや、夢であって欲しいが、夢なんかじゃなかった。

昨日体験したことは実際にあったことだ……。

黙々と学校の準備をして時計を見る。

8時20分・
・
・
・

ぎりぎり間に合う時間だ。

いつもは目覚ましで起きないから、遅刻してしまう。

・ ・ ・ たまには早く行くってのもいいだろう。

早々に家を出て（っと言っても十分遅いけど・・・）学校へ向かうことにした。

ゆっくりと歩いている時間はないが、どうせ遅刻しても何も言われないのだ、のんびり歩こう。

•	•	•	•	•	•
	•	•	•	•	•
		•	•	•	•
			•	•	•
				•	•
					•

何事もなく無事チャイム二分前に学校に到着した。

——いや、まあ……そりゃ、驚くのもわかるんだけど……

クラスの人口の半分以上は俺が教室に入った時点で目を丸くしていた。

「どうした」だとか、「かぜでもひいたか？」とか色々心配してくれる。

「そんなに俺が早いと変？」

「当然」と頷く一部の人間（昨日走りになった相川を含む5人）……

——こいつらはいつか泣かす。

その5人には、軽く目潰しでもしてのんびり席についたところでチャイムが鳴った。

担任も入ってくるなり目を丸くして俺を見た。

腕時計を確認して。

俺を見て。

前の席のやつに確認をして。

俺を見て。

出席簿を見て。

俺を見て……

「重役出勤はどうした？」

——・・・担任までそんなこと言うか？

「たまには早く来る事もありますって」

「なるほど」一人うんうん頷いて「平社員になったって訳か」

「何ですか！——てか、お前らも納得した顔すんな！」

うんうんうなづくクラス一同。

——なんてひどいクラスだ・・・

その後、各授業が始まって先生が俺を見るたびに確認作業をしてきた。

——遅刻魔の俺をからかうよか、目の前で寝てるやつをいじったほうが良いと思うんだけどな。

・・・そして昼休み中。

いつものようにパシリ決めをしないで、もそもそとコンビニパンを食べながら廊下をぼうつと眺めていた。

—こうしてると、昨日のことが夢見たいだな。

教室前を行き交う生徒を眺めていると、ふと、一人の生徒に目が止まった。

小さくて、ひよろつとした……

—さい……とう………？

それは斎藤涼その人だった。

急いで廊下に出る。

そいつはのんびりとした様子で前を歩いていく。

—声をかけようか……

一瞬昨日のことがよみがえる。

パンを戻しそうになる。

どこに行くかだけ確かめよう。

俺は斎藤の後を追った。

第15話 翌日SIDE 'B (後書き)

なんかすっごい短くなった・・・
やばいです。ネタ切れの兆しが・・・
勢いでいつも書いてるんでこんなものなんでしょうか・・・
不安だ・・・

第16話 夢（前書き）

やっとこここの話で主人公の名前が出てきます。

詳しい解説とかはありませんが、SIDE A側の主人公は最初職員室によばれてたほうです。
念のため。

第16話 夢

いつもの机、いつもの授業、いつものクラスメイト…

かわらない日常は、いつも移ろいやすく、だからこそかけがえもない。

SOULEATER 第16話Side:A

「夢」

一番前の列の廊下側の席、俺はカバンをおろし机に突っ伏す。

- ああ、天国だああ…

眠気に耐えて登校した体をねぎらつように意識は微睡んでいく…

『南、南、み〜な〜み〜』

ゆさ、ゆさ、ゆさ、…

至福の時間を邪魔する声。

- 誰だ？

『起きろって…おい!』

-無理、寝かせろ。

心で呟くも、聞き入れてもらえるわけもなく、声の主は
「はあああゝ」

と長くため息を吐いた。

『何？寝不足なん？』

-ソウデス寝不足デス

再び心の中で呟く。

『いつまで寝てりや気が済むんだ？放課後だぞ』

-何？放課後？

朝から今まで寝ていたってことは…六時限熟睡か…

『わかったか？』

声にたいして手をひらひらさせて

「了解」

の意を示す。

開かない目を無理矢理開けて、だらんと伸ばしきった手を机に付いて、真横を向いていた首をただし、全身に力を入れて立ち上がる。

『おはよう』

「おはよう」

起こしてくれていたやつをみた、窓から入ってくる光で影になって顔はわからなかった。

『約九時間の睡眠の感想は？』

「野郎に起こされたことが心残りだな」

そいつは『ははは』と笑いながらも再び『何でそんなに眠かったんだ？』と聞いてきた。

「なんでだろうな……」

昨日は何をしていたっけ？

職員室に呼ばれて、木陰で眠りこけて……

……？

思い出せない……

『昨日はうちにきたろ？』

……ああ、そうだ確か斎藤の家に……

一瞬目の前が暗くなり、次の瞬間足元にはリノリウムの床ではなく、フローリングの床が広がっていた。

「!？」

鼻を突く異臭、赤黒く変色した液体。

椅子に腰掛けたつぎはぎだらけの人形…

きりきりきり……ぶち…

ごとん……

人形の首が落ちた。

その顔は……

その顔は…

その人形の顔は…

恐怖に引きつった俺の母親の顔だった。

「な…!？」

一歩あとずさる俺の背中に何かが当たった。

そいつは

「にゃあ」

と音がしそうな程顔を歪めていた。

『どうした？』

斎藤だった。

「おまえ…」

『昨日はあまり食事に取り付けなかったから貰いにきた』

俺の腕をとり、発達した犬歯を突き立てる。

ぶっん！

皮膚を突き破り、鮮血が溢れる。

じゅる、じゅる、じゅる…

音を立てて吸っている。

『きみい、質問中に逃げちゃいけないなあ…』

不意に後ろから男ののぶとい声。

昨夜の警官だった。

『そんな悪い学生には罰を与えないとねえ…』

首を両腕でがっちり固定して舌なめずりをする。

- 待て、待て、待て、待て！

次の瞬間起きることを想像するとぞっとする。

「まじかよ！

目の前で腕に食い付く斎藤を振りほどくこともできず、

首筋に

牙が

「やめろおおお！！！！」

…ぶつり。

目の前が真っ暗になった。

がた！

「あ」

グサ！

「いいってええええ！！」

首筋に走る痛み。

体は軽く、痛みも小さい。

…？あれ？

クラス中の視線が集まっている。

盛大に寝呆けたらしい。

念のため首筋に片手を添えてみる。

何か堅いものが刺さっている。

目の前の生徒もそれを見ている。

—堅くって、円柱型で…

…パキッ

………ことん。

…からからから…かた。

「…は？」

首筋から落ちたのはシャープペンシルだった。

どうやら芯が折れたらしい。

「…！」

芯が

「折れた」

つてことは折れた芯は…

「首のなか、か…」

「大丈夫か？」

近くにいた生徒が話し掛けてきた。

相川 樹だ。

「まあ血が出てないから平気でしょ」

そういうと相川は

「よかった」

と言いながら落ちたシャープペンシルをしまいこんだ。

「おまえが刺したんか…」

「いやあ、起きないと思ってさ」
などとぬかしやがる…

「ちよっと手、出してみて」

無理矢理相川の手をひっぱりだして、机からカッターを取り出す。

「…え？」

どつ引きの相川を無視して刃を調節する。

チキ…チキチキチキチキ…

ちらちらと相川をみながら。

チキチキ…

わざと出しすぎたりしまいこんだりする。

そのたびに顔が青くなったりほっとしたりしている。

チキチキ…チャキ。

カッターを逆手に持ちなおして相川の手を甲を上にして机のうえに置く。

「開いて」

恐る恐る開く。

かぁん！

指と指の間に勢い良くカッターを刺す。

空洞の机が音を響かせる。

「思いつきり開かないと刺さるよ」

いった途端にピンツと指をのばした。
他の生徒も今の音でよってきている。

「んじゃ、さっきのお礼な」

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、……指と指の間をゆっくりと
したペースでカッターが突いていく。

かっかっかっかっかっか……

徐々に早めていく。

ちらちらと顔をみながら速さを調節して遊び、一気に早くする。

かかかかかかかかかかかかかかかかかか！

びびって逃げようとする手を片方の手で押さえているのでなかなか
調節が難しい。

「へたに動かすと刺さるぞー」

ーあ、おとなしくなった。

観念したのか手から力が抜けていった。

が、顔を背けている。

いま、周りにはかなりの数の生徒が見守っている。

そんな中、相川だけ直視していない。

かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか…カン！
けたたましい音を立てたカッターを机に刺した。

「ど？楽しかった？」

フルフルと顔を振る相川。

まあそりゃそうか。

まだ固まっている相川を無視して、あいつを探すことにした。

「社長はどこいったん？」

近くの生徒に聞いた。

「そこにいるよ」

と外を指差す。

その先には……

「斎藤！何であいつが？」

瞬間考えるより早く、教室を出ていた。

「ひゃ！」

「うお！？」

入り口で女の子にぶつかりそうになった。

「ごめん！」

そいつって廊下を走る。

後ろのほうからその女の子の声で

「相川樹の妹ですけど、兄はいますか？」

そんな声が聞こえた気がした。

ふとポケットに手を入れると先程のカッターが入ったままだった。

第16話 夢（後書き）

もうすぐ終わりそうですね・・・お話が（決してネタ切れではありません）

大体の骨組みはできてます。

というか、もう続きも考えてあったり・・・

第16話 SIDE・B「誘い」(前書き)

こちら側の主人公もやつと名前が……

SIDE・Bの主人公はパンのお話(3話目)の時の主人公です
では、本編をドウゾ。

第16話 SIDE：B「誘い」

体育館は、校舎から少し離れた位置にあり用の無い生徒は滅多に近寄らない。

入り口に何人が生徒がいるだけで他に教師も見当たらなかった。

そいつは生徒の間を通って中にはいっていく。

―何しに行くんだ？

同じように生徒の間を抜けていこうとすると、中に見知った顔を見つけた。

目が細くて、ハゲで（本人曰くスキンヘッド）、仏頂面。

「野田」

声に生徒は振り向いた。

―むう、やっぱり迫力あるな…

ガタイがいいこともあって中々威圧感がある。

「…ドモ」

その上無口だからなおさら他の生徒に恐がられる。

「中に用ですか？」

「ああ、ちよつとな」

訝しげに中を覗き込む。

「誰もいませんよ」

他の生徒が答える。

―何？

「中に知り合いがいる」とは言わずに

「先にきちゃったか」

とつぶやく。

―ああ、最悪死ぬのかな…

入り口付近で急に恐くなってきた。

中にいるはずの奴は、知り合いの顔をした化け物…昨日はうんよく抜け出せたけどおそらく今回はやばいだろう。

ぎい　い　い　い　い　…

重いドアを開ける。

「野村先輩」

野田の声に振り替える。

「部活の件考えてくれましたか？」

―部活？

なんのことだかわからずに一瞬考えたが、すぐに

「軽音楽部」

のことだと思い当たった。

何でも部員が足りないから、誰でもいいから入ってほしいんだとか。

「二年より、誰か一年入れるよ」

「一年は、大体声かけました」

―おまえが誘ったんじゃ『脅し』だ。

「そうだな…俺のクラスの相川って奴の妹が、音楽好きらしいぞ」

「ホントですか？」

「本当だ」

少し早口に答える。

「じゃな」

軽く挨拶をして中にはいる。

ぎいいいい…

ドアが重そうにしまった。

「コンニチハ」

「よお」

SOUL EATER 第16話SIDE:B 「誘い」

挨拶を返す。

そいつは知り合いの顔をしていた。

「わざわざなんのようかな？まさか―」

「その顔を今すぐやめろ」

ことばを遮る不満そうにそいつは顔を片手でおおつとすぐに手をどかした。

その下にはすでに違う顔―二十歳を少しすぎたぐらいの女の顔になった。

「真っ先に…君を殺そうとしていた」

いきなり語りだす口調は、完全に女の声だった。

「野村 勇二…」

「なんだよ」

いきなり名前を呼ばれた。

二十歳ぐらいの女の声で。

「……ちよつとうれしかった……か？」

「君はいつもふざけているけど、いざというときの行動力は素晴らしいようだ」

体つきも女になったらしく、全体的に丸みを帯びていた。

「そりやどうも」

不満そうに返事をする。

「斎藤家での君の行動……あれは予想していなかった」
「……ああ、とっさに突き飛ばしたりしたよな。」

「そこで……だ」

腕組みをして俺を直視してくる。

「君は見逃してもいい」

「何？」

「その代わり」

目つきが鋭くなり、俺の体を射抜く。

「手を組まないか？」

口の端が「クイツ」と上がった。

それは、斎藤の家で、斎藤が見せた笑い顔だった。

以前の斎藤なら決してしなかった顔。

歪んだ笑顔。

「どういうことだ？」

喉がカラカラと渴く。

背中はいやな汗をかき始めている。

「何、簡単なこと」

「ぺた、ぺた、ぺた……」

ゆっくり歩きながら話を続ける。

「君は私に殺されない代わりに食料を確保する」

「食料？」

「そう、イキのいい人間」

「・・・」

「何、毎日食うつて訳じゃない・・・一週間に一人か・・・少ないときは一ヶ月に2、3人で良いんだ」

視線は俺を見ないで、天井を見ている。

「そんなこと、協力するとても？」

精一杯の抵抗を試みる。

頭の中ではこの誘いを受け入れるか、拒否するか、思考が暴れている。

「するさ」

いやにあっさりと問いに答えた。

「なぜ？」

「その質問はそのまま返そう・・・なんで、君は私を追ってきた？」
先ほどの鋭い視線ではなく、どことなくやわらかい・・・子供のじやれあいを見ているような目で俺を見ている。

「・・・」

その問いには答えられなかった。

なぜ？

それは俺も感じていた。

何でここまでこいつの後をつけていたのか？

無視していればそれで済んだことなのに。

わざわざやっかいなことに首を突っ込むなんて・・・

ちっばけな正義感のためか？

それとも、こいつと手を組むため？

なんでだ・・・？

なぜ・・・？

体育館のドアが重い音をたてて開く。
そんなことお構い無しに全てを吐き出す。

「テメエは俺の親友を殺した！だから俺が、ぶちのめす！！！！誰
のためでもない、俺のためだ！！！」
ビシッと指差していつてやった。

第16話 SIDE:B「誘い」(後書き)

さてさて、急に登場人物・・・といってもまあ、ちょいやくばつか
ですが出てきましたね。

今までが人が少なかったただけなんです・・・。
最近乗りが良いのか、執筆が進みます。

では、次回またお会いしましょう。感想お待ちしてます。

第17話 side A - 変貌 -

社長の後を追って、ついに体育館前まで来た。

確かに二人は中に入っていた。

「あれ？南先輩？どうしたんすか？」

ふと声を掛けられる。

掛けてきたのは 堺・真治と言って俺の一年後輩にあたる。
確か昔から「俺はギターをやる！」と言って、高校に入ってから軽音楽部創部に向けて走り回っているらしい。

「おお、久しぶり」

高校に入ってからはかなり疎遠になっていたが、昔はよく遊んだ間柄だ。

軽く片手を挙げて答える。

「中に用ですか？」

「ああ、ちょっと探してるやつが中に入っていくのを見てね」

「ふーん」とでもいいたそうに俺の顔を見ながら「でも・・・」と付け足してきた。

「さっき他の人が入っていきましたけど、その人ですか？」

「やっぱり入っていったか・・・」

心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

「ああ、野村勇二って言うんだけど・・・知ってるか？」

ふと、隣のやつを見た。

中々威圧感のあるそいつは俺を頭の方からつま先まで見た。

「なんだ？こいつは・・・？」

「野村先輩なら・・・」

「先輩」と言っつてことは俺よりも年下なのだろう。
それにしてもかなりの迫力である。

「さっき中に入っていました・・・」

低く、ゆっくりと落ち着いた感じの話し方を見る限り高校生らしくない。

ついついそんなことを思ってしまう風貌なのだ。

・・・頭づるっつるだし・・・

「ああ、こいつ一年の野口 一矢って言っています」

慌てて堺が紹介をする。

「こつち俺の中学の先輩の南 太一先輩」と、俺のことも紹介してくれた。

「よろしくお願いします」

「え・・・ああ・・・うん、よろしく」

「・・・一体何がよろしくなんだろう・・・？」

「野村先輩に用があるんですか？」

野口と紹介された一年生が聞いてくる。
威圧感がかなりすごい。

「ああ、ちよつとな」

そう言つて体育館のドアに手を掛ける。

「先輩、また今度遊びましようよ、久しぶりに」

「そうだな、野田君や野村も一緒に遊ぶか」

「いいっすね」と言う声を背中に受けながら重いドアを押し開ける。

ぎ
いいいいい・・・

鉄製ドア特有の金属音を発しながらドアはゆっくりと開いた。

中はそこだけ夏が残っているようにもわつとした空気を溜め込んでいた。

「テメエは俺の親友を殺した！だから俺が、ぶちのめす！！！！誰のためでもない、俺のためだ！！！！」

いきなり聞こえる怒鳴り声。

間違いないこの声は野村のものだ。

相手はこの様子だと、「あいつ」か……

昨日のことが頭の中に蘇る。

歪んだ笑みをたたえる斎藤涼だった者。

血だらけの家……

そして、夢の中にあつた、親の顔をした人形。

「……出てきたらどうだ？」

知らない女の声がした。

声から察するに20代だろうか？

若い感じがする声だった。

「……南？」

こちらは野村の声。

恐る恐る二人の視界内に体をさらす。

「……誰だ？」

一人は社長——野村勇二。

もう一人の女は……？

知らない顔だった。

「やあ」などと馴れ馴れしく挨拶をしてくる。
が、知らない。

「おい、この人は誰だ？」

野村に聞いてみる。

「斎藤だ」

・・・聞かなきゃ良かった・・・

予想していたが、否定されることを期待していたのだがその願いは
あっさりと砕けた。

「あれが・・・？」

分かっていることだが、自然と口にしてしまう。

斎藤の家で一度見たはずだ。

やつの顔が老人に変わるのを・・・

「まさか南君、君まで来てくれるとは思わなかったよ」

パーティーに来てくれた友人をもてなすようにそんなことを言う。

「これで・・・」

暑苦しい体育館の室温が少し下がった気がした。

「私のことを知っているやつは全員始末できる」

——ぞくっ

寒気がした。

生まれてこの方感じたことのない寒気を。

吐き気を催すほどの悪寒。

目の前の女がとても凶悪なものだと体が、心が、認識した。

「・・・逃げたくなるな」

「できればそうしたいけどな」

野村はじつと女を見つめていた。

顔には熱さのためか汗をかいている。

顎からあせが床に滴り落ちるのも気にせずそいつから目を離さないでいた。

「げえええ・・・あああうううおおおううう・・・」

突然呻き声が聞こえた。

それは女の声だった。

先ほどの女が発していたのだ。

顔は床を見ているのか下を向き、両腕はだらんと垂らしている。

時折びくつびくつと体が脈打っている。

「おおおおおううつうつうああああああ．．．．」

人の声とは思えないほど醜い呻き声。

「あああああ．．．．」

その声が徐々に小さくなるころ俺は目を疑った。

目の前にいるのは、どう見ても華奢な体つきの若い女なのだが．．．

・

「嘘だろ．．．．」

腕が黒く変色し、太さが女の太もも以上になっていた。

「嗚呼嗚アア亜嗚呼阿蛙アア啞ああ！！！！」

髪を振り乱し、絶叫している女は、もう、女の形をしていなかった．．．

「．．．．．」

いたのは、プロレスラー顔負けの体軀をした、黒い皮膚に血管を浮き出させた怪物だった．．．

「ふしゅうつうつうつ．．．．」

呼吸なのだろうか？ため息なのだろうか？タイヤから空気が抜けるような音が聞こえてくる。

それは目の前の怪物が放った息。

額には血管のような管が何本も走っていたが、そのどれもが青白く発光していた。

目は充血したように赤く、口は犬歯が飛び出るほど発達しており、くいつと端が持ち上がっている。全体的に黒い。

「何なんだ……お前は……」

やっと喉から声が出た。

そう……なんなんだよ……
お前は……誰だ？

第17話 Side B - 正体 -

扉を開けて入ってきたのは南 太一だった。

あいつの視線が俺から南のほうへとずらされると、一瞬体を押さえつけるような悪寒が抜けた。

「やあ」なんて挨拶をしている。

体育館は蒸し暑い。こうしているだけで汗が噴出してくる。

いくつか南と受け答えをしていたが内容なんて忘れた。

後ろで南が息をのんだようだ。どうやら正体に気づいたらしい。

「私のことを知っているものが始末できるのだからな・・・」

突然女の顔をしたそいつは顔をうつむいて脱力したように棒立ちになる。

「うう・・・ううううううううう・・・」腹のそこから搾り出すような低く、そして重い呻き声を上げ始めた。

先ほどまで蒸し暑く、汗が噴出すほどだった体育館だったのに今は全身が総毛立つほどの寒気に体がつつまれていた。

冷や汗が噴出す。

「おおお・・・おおおおおおおお！！！！」こだまする絶叫。

そいつの体はいつのまにか変色し、体中には青白いラインが根を張るようにびっしりと走っていた。

黒人のそれよりも黒く、プロレスラーの腕よりも太く、空想の吸血鬼のように長い犬歯。

つりあがった口端。

「アア蛙あああ阿啞亞あA A a 吾ああああああA A あああA A・・・！！！！」

人の声とは思えない叫び声はびりびりとガラスを揺らし、圧倒的なプレッシャーを俺に与えた。

足はすでに竦んでいる。

「逃げたいな」南がぼつりと言う。

「できたらな」正直に言う。

無理だ。足が動かない。

「ふうううううう・・・」深呼吸のように深く息を吐いてそいつは俺たちに顔を向けた。
「・・・」

絶句・・・

そんな言葉が似合いすぎるほどの沈黙俺たちは動くどころか声すら出すことができなかった。
そんな反応を楽しむようにつりあがった口をしている。

「・・・だよ・・・」

ポツリと聞こえた。

「・・・なんだよ・・・」

また聞こえた。

それは南の声だった。今にも消えそうなか細い声で何かを問う言葉。
俺もそいつも言葉を聞いていた。

ぶつぶつと同じ言葉を繰り返し、それは徐々に大きくなってきた。

「・・・何なんだよ！お前は！！！」

・

・

・

・

「ククク・・・」漫画のような笑い声が発せられた。
発したのはやつだ。

「そうだな、どうせ死ぬんだ教えてやろうか・・・」

低く、脅迫するような声。

「巷じゃあ、吸血鬼と呼ばれているらしいな」赤く充血している目を細める。

「残念だがそれは俺じゃないんだなあああ・・・」

口をさらに歪めて言う。

「元は俺だから、まあ、俺が死ねば大体は消えるだろうがな」

よく意味がわからない。

「俺の名前は・・・」

緊張とは程遠い雰囲気だが、俺は一步たりとも動くことができない。

「『ソウルイーター』だ」

次の瞬間俺の体は何かに殴り飛ばされ、2、3メートル離れた体育倉庫に突っ込んでいた。

悲鳴をあげる暇もない。

―あー、・・・死ぬかなこりや・・・

背中を強打したため、呼吸が止まり、意識が朦朧としてきた。

―いつてえなあ・・・クソ・・・

目の前が暗闇になった。

第18話 対峙

化け物に変身したそいつは、目の前にいた野村を簡単に吹っ飛ばした。

勢いよく吹っ飛んだ彼はそのまま体育用具室に突っ込んでいった。けたたましい音を立てていた。

目の前の異形の化け物・・・『ソウルイーター』と自ら名乗っていたそいつはゆっくりと南のほうへと顔を向けた。

発達しすぎた犬歯が口の端から覗き、口端は釣りあがっている。

顔だけ見れば一般にいられている吸血鬼のイメージに近いだろうが、それは全身にイカ墨でも塗ったかのように真っ黒なのだ。

もとの姿のときに着ていた服は体が膨らんだため、ぴちぴちになっており、袖やすから覗く顔を含めた皮膚には青白いラインがびっしりと走っている。

「ソウルイーター・・・？」

オウム返しで、名前を繰り返す。

顔を向けたそいつは一瞬で数メートル離れていた南の目の前まで移動した。

「！！！」

目を見開き驚愕の表情をした瞬間目の前が何かでふさがれた。

次いで鋭い痛みが鼻を突いた。

「くぁ！」

たまらず声を上げる。

大したことはない痛みなのだが、突然の出来事に体が過敏に反応してしまう。

一歩二歩後退して相手を見据える。

これがただの喧嘩だったら彼もやり返していただろう。

野村が吹き飛ぶ瞬間までは戦うか逃げるかといった選択肢があった。やられるにしても一発ぐらいは殴ってやろうと。そんな考えも野村が吹っ飛んでいく様を見て頭から吹き飛んでしまった。

「ぐぐう・・・」呻き声にような声を上げながら閉じてしまった瞼を開ける。

生暖かいものが鼻と口の間を流れている。

鼻の奥でじんじんとする鈍い痛み。

目の前にいるそいつは歪んだ笑みをしていた。

怪物に変身する前の斎藤の姿のときと同じ歪んだ笑み。

「う・・・ぐうう・・・」

口で息をしながら、そいつを睨みつける。

ニヤニヤとしているそいつは先ほどと同じ位置にいる。

―遊んでいる・・・

混乱しかけている頭でもそれだけは鮮明にわかった。

いきなり目の前まで詰めてきて一発軽く顔を叩く。

そんな芸当をするって事は向こうの実力はかなり上だと見て間違いない。

その気なら今の一発で殺すこともできただろうに。

それをしなかった。

鼻がふさがっていてまともに息ができないため思考も徐々に緩慢になっっている。

―野村は生きているのだろうか？

そんな心配が南の頭をよぎった。

第19話 side A - 意地 - (前書き)

携帯で見られる方はかなり読みにくいかもしれませんが。

PCの方では改行はしているんですが、見にくかったら読む前に改行の設定を変えて読んでください。

第19話 side A - 意地 -

逃げられないのは理解した。

多分こいつのことだから俺たちを見逃しはしないだろう。

生き残るには、こいつを倒さなくてはいけないって事だな。

鼻から流れていた血を拭い去り、鼻腔に溜まっていた血液も吐き出す。

「準備はいいか？」

『ソウルイーター』と名乗ったそいつは問い掛けてきた。

「意外だな。待っていてくれたのか」

できる限りの皮肉を込めて聞き返す。

「そのとうりだ」

頷きながら、答える。

大げさに。

「紳士なんだな・・・待たせた、いいぞ」

膝が笑いそうで、歯はガチガチと音を立てそうで、心はすでに折れそうだけど・・・

無理矢理抑え、食いしばり、反り上がらせた。

「逃げる獲物を狩るのもまた楽しいのでな」

・・・前言撤回。

その言葉を合図に走り出した。

体育館内は障害物がなく、隠れる場所も無い。

それなら外に出たほうが逃げ切れるというものだ。

急いで扉まで走っていく。

ぞくっ

一瞬総毛立つような悪寒がして咄嗟にしゃがみこむ。

その上を何かが通過していった。

がつっ

目の前の扉に何かが刺さっていた。

体育でよく使う槍投げ用の槍・・・

それが深々と鉄製の扉に突き刺さっていた。

―嘘だろっおい！

すぐに方向転換をして扉から離れる。

立ち止まっていたらいつ何をされるか分かったものではない。

壁沿いに他の出口に向かって走り出す。

走り抜けた後を何かが突っ込んでいく。

黒い円盤だ。

その時やっと思い立った。
体育館は道具の宝庫のわりに障害物がまったく無い。
狩にはうってつけだった。
だからこいつは……

俺たちは誘い込まれたんだ！

悔しくなった。

が、今は後悔している状況ではない、立ち止まらない。
走るしかない。
止まったら……死ぬのだから。

円盤も投げ終わったらしく次はバスケットボールが弾丸のような速さで飛んできた。

とてもボールとは思えない破壊的な音を立てて壁にぶつかる。
必死に逃げるしかなかった。

いくらスポーツ用の用具だからといって直に受け止めようものなら骨折は必至。

それだけの威力が音を聞くだけで伝わってくる。

ひゅっ……ズドン！

ひゅっ……ズドン！

誰もいない体育館にはうるさくその音は響き渡る。
必死に走りまわり狙いをずらす。
今はそれしかできない。

徐々にスタミナが切れて動きが鈍くなった足をそれでも必死に動かす。

何分走っただろうか？

呼吸するのも辛く、頭がガンガンする。

―なんで走ってるんだ・・・？

疑問が生まれてくる。

―瞬足を止めそうになる。

―走らなきゃ・・・死ぬ・・・

疑問をねじ伏せて再び走り始める。

足が重い。

呼吸がきつい。

頭がイタイ・・・

体がイタイ・・・

―・・・もういいかな・・・

朦朧とする意識の中そんなことを考え始めていた矢先頭を何かが掠める。

―・・・そうだ、まだ、止まらない。・・・あいつのぶちのめすのだから。

「ううう………」

声を漏らす。

辛いことに対しての声ではない。

諦めかけている自分に対する叱咤の声。

「ううう……おおおおおおお!!!!」

無気力になっていた足に、肺に、頭に無理矢理活を入れる。

―まだ、諦めるわけにはいかない。

南は再び力のこもった瞳でソウルイーターを睨みつけた。

チャンスが来るのをひたすら待ち続けることにした。

第19話 Side B - 暗闇 -

真っ暗だった。

何もない中空を漂う感覚。

音も、臭いも、触覚さえ感じない空間に横になっていた。
空気があるのかどうかさえ分からない。
目を開けているのか？

それとも閉じたままなのか？

思考だけはしっかりとしている。

立ちたくとも、体が動かない。

指一本動かない・・・いや、動かし方が分からない。

ただただ暗い空間が目の前に広がっている。

—ここは、どこだ？

声も出せないらしく、心の中で呟く。

声が出ないのか、空気がなく真空なのか・・・どっちにしろ声が聞
こえない点では一緒だ。

—あれからどうなった？

あの時俺は突き飛ばされて体育用具庫に突っ込んでいて・・・
気を失った・・・のか？

—これは・・・気絶しているために見る夢・・・か？

分からない。

分からないが、頭のどこかで「違う」と答えを出している自分がい
る。

どう違うのかは分からない。

現に俺は体育用具庫に倒れているはずだ。

・・・多分。目の前真っ暗だけど・・・

体動かないけど・・・

・・・

・・・

・・・

息してないんですけど・・・

いまさらながらに気が付いた。

呼吸している感じがしない。

むしろ仕方を忘れた。

横隔膜なんてどうやって動かすんだっけ・・・？

何度か呼吸を試してみようと心がけて止めた。

苦しくならないから。

普段何となくしていることっていざやり方忘れるとできないもんだな。

などと一人感心してまた振り出しに戻る。

・・・ここはどこだ？

延々と俺は一人でこんなくらいところでこんなこと考え続けるんだろっか・・・？

ふと、胸のあたりが熱くなっているのに気がついた。
ちょうど奴に突き飛ばされた場所だ。

その熱は徐々に高い温度になっていき、俺の胸を焦がすほどになった。

あちちちちちちちち！！！

暴れようにも体が動かない。

あちちちちちち！！！！！

熱はどんどん体を包み込んでいく。

それと同時に目の前が白んできた。

それは太陽のようにまぶしく、俺の視界を白一色に染めていった。

次の瞬間俺は体育用具室の中に横たわっていた。

第20話 Side A 執念

「はぁ、はぁ、はぁ・・・クソ！」

階段を駆け上がりながら俺は毒づいた。

あいつはバスケットボールの次にソフトボールを使い始めやがった。それも一個ではなく、驚掴みにしてだ。

二個や三個ではなく、五個から六個の玉が飛んでくるわけだ。

昔の野球漫画でいう『分身魔球』見たいなもんだ。

・・・こっちは全部本物だが。

投げる球は変わらずものすごい音を立てて壁に激突する。そしてめり込む。

カンカンカンカン・・・

軽快とはいいい難いリズムで階段を上っていく。

既に足は棒のようになり、疲弊しきっている。

今上っている階段は体育館の二階に上るための階段である。この高校は体育館は地下と地上二階の計三階で、奴がいるのが一階俺がむかっているのが二階である。

二階は吹き抜けになっておりギャラリーがあるだけだ。

あるのは一階にもあった体育用具室のみ。

ソフトボールがかすった腕は既によくてヒビ、最悪折れているんじゃないかと思うほど赤黒く腫れだしている。

「はぁ、はぁ、はぁ、」

呼吸すらメチャクチャになり、口のなかは鉄のような味が広がっている。

あいつは俺が上ってくるのをにやにやしなから待っていることだろう。

だが、俺もただ逃げていたわけじゃない。

逃げていてわかったこと。

やつは『精密性』に欠けている。

そうでなければ俺は既に槍に串刺しになっているはずだ。

もしくはソフトボールで穴だらけになっているだろう。

それは奴もわかっていているらしくだからこそ驚掴みにしてボールを投げてきたのだ。

「はあ、はあ、はあ、…ふう…」

階段を登りきり二階のドアの前に来た。

ここを開けたらまた、休めない。

一呼吸をおいて、思い切ってドアを開ける。

途端にドアに轟音がした。狙い撃ちをしてきたのだ。

最終ラウンドのゴングが

今、鳴った。

第20話 - Side B -

突然視界が開けた途端胸に感じていた熱さは強烈な痛みとなって襲ってきた。

「がぁぁ！？ガツハツふううう…！？」

言葉にもならない痛みというものを初めて実感した。
無駄だと解っていてても体が勝手に悶える。

メチャクチャに。

生きていることを主張するように。

ただ、激しく動く。

「あ、アぁぁアア阿アAア合明あぁ！？」

こだまする絶叫。

聞くものはいない。

ただただ叫ぶ。

痛みを紛らわすためか、生きるためか、何のためか？

体は痛みを拒否し生を望み死を拒む。

叫びは意識とは別にほとばしる。

体は液体の上をのたうち回る。

「あぁぁあううえええ…！」

徐々に落ち着き痛みも自然と引いてきた。

いや、

「落ち着いた」

という表現は適切ではなかった。

- あぁ何か眠くなってきたな…

痛みよりも眠気の方が上回り始めていた。

全身の感覚が鈍くなり始めていたのだ。

ふと、首を横に倒しさつきから絡み付いてくる液体を見た。
―ぬる。

―べた。

はっとして、自分の痛みの中心に手を当ててみる。

―すかつ。

何もなかった。
手が空を切った。

頭が一瞬真っ白になる。

―あれ？

彼の中で時間が止まった。

―もしかして、俺、死ぬ？

当然のことが頭の中を駆け巡る。

痛い、眠い、苦しい…

嫌だ、死にたくない！！

思い出したようにぶり返す痛み。

「おおおおあええおお！」

時間が動きだした。

彼は気付いていなかった。

既に致死量を超える失血をしていたというのに、意識が逆に鮮明になりつつあるということ。

第21話 逃げる者追う者

ソフトボールが物凄い勢いでドアやら壁やらに激突してけたたましい音を幾度もたてている。

そのたび倉庫が振動する。

その中で俺は体育用具をどこかに使えるものを探していた。
とはいえそこは

「予備倉庫」

なのであって大した物は置いていない。
せいぜいラインマーカーの用具や、各種ボールが置いてある程度である。

―さて、どうしようかねえ…

けたたましくなる衝突音が反響する中次の一手を考えることにした。

↓その頃の体育館一階↓

彼は、手元にあるボールを手当たり次第投げていた。

人の姿でいた頃よりも大きくなった体ではソフトボールでさえ、たいた大きな大きさではなく驚掴みにできる。

それを一度に投げ付ける。

その異常発達した筋肉はいともたやすく80メートルはあるのかという体育館倉庫まで届いていた。

何度も何度も投げ続ける。

手玉はいくらでもあった。

跳ね返った玉がそのまま再び彼の手玉になっている。

玉は尽きない。

ただ、いささか飽きてきていた。
痛みへのたうち回るわけでもなく、ただ逃げて、最後には倉庫に閉じこもってしまったのだ。

これでは狩りにならない。

もう一人の方は既に息絶えていることだろう。

あとでゆっくり命を喰うとしよう。

楽しみは後だ。

腹が減れば減るほど御馳走は旨いのだ。

大きく裂けた口の端が微かに釣り上がっていた。

これから来るであろう至福の時に向け彼は弾丸を放ち続ける。

題21話 SIDE B 再生

どこかでやかましい音が鳴っている。

そのせいか、床が振動しているのが分かる。

その振動は、俺が生きていることを確認させてくれる。

胸にぼつかりと空いた穴から溢れる液体は、まだ流れているのだろうか？

体は既に脱力感に襲われて、指一本動かせる気がしない。

痛みも無く、床の冷たさも既を感じない。

ただ、振動が俺の意識をさらにまどろみの中に誘っていく・・・

「ふうう・・・」ため息のように息を吐いて、意識を何とか覚醒させようと試みる。

呼吸とは、体中に酸素を送り届けるために行うことであって、心臓がなくなった俺の体では意味の無い行為だとは思うが、一応「呼吸のつもり」で、やってみる。

うるさい音がなっているが無視する。

今、何かを考えていたら、それこそ意識を失ってしまいそうだった。

（数学の授業中みたいなもんだな・・・）

頭の中で、昨日の授業風景を思い出す。

眠くてやる気が起きなくて・・・

「クク・・・」知らず知らずに声が漏れた。

こんな状況でも笑えるものなのかと自分でも驚いている。

全身の感覚を失っているはずなのに、意識だけは何とかつなぎとめている。

いつまでもつか分からないが、やれるだけ意識を保ってみよう・・・

・
自分に言い聞かせて、彼はまた「呼吸のつもり」で息を吐くふりを
してみる。

横隔膜も無いらしく、息すら吐けなくなっていた。
恐らく先ほどの呼吸も全くできていないのだろう。

不思議に落ち着いてる自分。

死ぬことを恐れていないのだろうか？

いや、死ぬのは怖い。

ならば、この落ち着きは何なのだろう？

自問自答を繰り返し、ふと、あることに気が付いた。

先ほどから意識がはっきりとしてきているのだ。

思考も鮮明になってきており、考えをめぐらせられる。

眠気も無くなっていた。

——胸が、熱い……

夢の中で感じた熱さが再び襲ってきた。

失いかけた視界で、何とか胸を見ようとしてみるが首が動かないた
めそれもままならない。

ただ、何かが体育館のほうから彼の方に飛んできていた。

それは、赤かったり青かったり白かったり、はては金色だったりと
様々な色をしている「モヤ」
のようなものだった。

「うっ……ふううう……」

自然と声が出た。

何かに後押しされるように呼吸を繰り返す。

額に汗を浮き出させて、胸を何度も上下に動かす。

「うっ……うあああああ……」

呻き声が口から漏れ出した。

なにがおきているのか？

呻き声をもらしている彼の胸は、驚異的な回復力を見せていた。
モヤのようなものが、ぽっかりと空いた穴の中に入る度に急速に組織が盛り上がり、筋肉、骨、はては内蔵までも再生していった。

彼の傷……といか、「穴」の部分も淡い光を放っていた。

題22話 獣

——なんだ？

彼は急に脱力感に襲われていた。
疲労とは違う。

全身から徐々に徐々に力を失っていくような感じがする。
とはいえ、それは大した影響力はなくいまだに破壊的な勢いで玉を
投げ続けている。
投げる、投げる、投げる、投げる。

それにもいささか飽きた。

彼の胃は空腹を訴えていた。
食事をよこせ。
腹を満たせ。

——・・・新鮮な血と肉をヨコセ

隠れて出てこないウサギよりも、食べごろの食事のことが頭をよぎ
る。

・ああ、ソウカ、この脱力感は・・・空腹だったカラカ・・・

姿だけでなく思考能力さえ人間では無くなってきた。

赤い赤い血の滴る肉

若くて、やわらかく、噛めば噛むほど味の染み出る。

若者特有の味の強い血。

それを同じ人間の肉と一緒に飲む。

この上なく美味く。

そして、文字どおり彼の血肉となる。

肉を食いたい肉を肉を肉を

のどが渴いた・・・血が飲みたい・・・赤くて、鉄臭くドロとした液体・・・

ハラガヘッタ

のどガカワイタ

一度空腹を認めてしまえば、彼の思考はそれのみに絞られていた。

ニクヲニクヲニクヲニクヲ・・・

血が飲みたい血が飲みたい・・・

肉肉肉肉肉にく!!!!!!

―くるりと、彼は向きを変えた。

いまだ血を流してい野村の方へと。

ひた、ひた、ひた、ひた・・・

一歩一歩近づいていく。

―ハラガヘッタ・・・

彼の右腕は、刺青のような模様が淡く光を放っていた。

それは、彼が人間味を失っていくほど徐々に徐々にぼんやりとした光になっていく・・・

まるで、それが彼の知性を表しているかのように。

第22話 決意

喧しい音が止んだ。

鼓膜に響いていたため、少しばやあつとするが平気な様だ。

恐る恐るドアに手を掛ける。

もしかしたら、ドアの前にいるのだろうか…

そんな考えがよぎる。

——いない、絶対いない！

強く自分に言い聞かせて、いくつもクレーター型の凹みが付いたドアを開ける……

ドアを開けた先には丁度そいつの後姿が見えた。ゆっくりと、一階の倉庫のほうへと進んでいる。

そこは、

物陰でよく見えないが、

足のようなものが見える。

その周りは何故か紅くなっているように見えた。

そこは確か野村が突き飛ばされたあたり。

じゃあ、

あれは、

野村の足であって

野村の血液・・・？

カッツと体が熱くなった。

近場にある何かを掴んで、思いっきり投げつける。

フォームもなにもあつたもんじゃない。

ただがむしゃらに、ただ、標的に向かって投げつけた。

結果、やつの胸に見事に命中して貫いた。

二階から投げつけたから余計に勢いが増したのだろう。

——やった・・・！！

心の中でちいさくガッツポーズ。

が、

それもすぐに凍り付いた。

投げたのは体育で使うやり。

確かにそいつの胸の辺りを貫いた。

それなのに……

そいつは、何事も無かったかのように向きを変えてこっちを見た。

胸をヤリに貫かれたまま……

納まり切らない犬歯が覗く口が左右に釣り上がっていた。

貫いたやりの辺りから黒々とした液体が流れだしている。

だというのに、そいつは動揺する様子が無かった。

苦痛に顔を歪めるのならわかる。だが、そいつの顔は嬉しそうに歪

んでいた。

無くしてしまった玩具を見つけたような、ほっとしてそれで何をしようかと期待に膨らませる。

・・・イヤ、子供ではなかったか。
その顔は人間のものではなかった。

たとえるのなら・・・

目の前で動くものを見つめる・・・

・・・観察というよりも、興味を示していて・・・

無邪気で、だからこそどうしようもない・・・

．．．．．目の前にごちそうを置かれてお預けを食らっている肉食獣だ．．．

．．．．．まだかまだかと、思い切り餌にかぶりつく時を待つような。

「まいった．．．．」

誰にいうともなくぼそりと小さく、本当に無意識につぶやきが漏れた。

なにがまずいのか、全く自分でもわからなかったが。

―いや、まずかったことが多すぎたというべきか。

とにかく、つぶやきとほぼ同時にしゃがみ込んだ。

その上を何かが通り過ぎ、先ほどまでいた部屋のドアを突き破っていった。

勢いよく突き破りすぎたために石灰の入った袋にでも当たったのだろう、白い煙がもうもと立ちこめていた。

口の中にのどが渴くような、粉っぽい張り付くような感覚がまとわりつく。

視界は白い粉塵の煙によって最悪。

もう、頭は認識している。

―これ以上逃げようがない・・・・・・・・と。

―何かないか？何か一つだけでもいい、目の前のやつに一泡吹かせられるような何か・・・・

―おそらく逃げ切れないだろう。

―逃げられないのならどうする？

―決まっている

―逃げられないのなら・・・・

―逃げられないのなら・・・・

・・・・・・・・

小さく、本当に小さく、呼吸ともいえないのではないかと思えるほど小さく。

一息吸った。

目は相変わらず目の前の煙を見ている。

中から機材が倒れたりする音が聞こえるところから、中で相手も視界を悪くしているというのがわかる。

……逃げられないのなら……

戦うだけだ。

先ほど吸った一息を吐き出し、一途白煙の中へと大きく踏み込んだ。

その瞬間体育用具室は大きな爆発音に発せられた。

第23話 抵抗

粉塵爆発。

文字通り粉塵に火を点けて起こる爆発現象。

白煙立ちこめる体育用具室、出入りは入り口のみ。

そこを閉めて少しでも火を起こすようなら、そこは即座に爆弾と化す。

南 太一の取った行動はただ一つ。

中に入りとにかく火を起こすこと。

手持ちでライターなどは持っていない。

ならば、火花をおこせばいい。

足元に転がる何かを拾い上げ振り回す。

質感からそれは金属特有のひやりとした感触。

わかったことはそれだけ。

だけどそれで十分。

大切なことは、今この手にに金属の棒を持っていること。

手探りで入り口付近の壁をさすり、ボタンを押す。

…カチリ。

乾いた音がした。

視界がわずかに明るくなった気がする。

目の前が真っ白なため実際はとうなかわからないが。
そして真上に棒をふり、蛍光灯を破壊する。行き場を突然断たれた
電流は、そこで不満を表すかのように火花を散らせる。

火花は、充滿している石灰にぶつかり、瞬く間に広がっていく。

石灰粉が燃え、それがまたまわりの粉に燃え移りそれがまた…

一瞬で密閉された部屋中に詰まっている粉塵が燃えた。

いや、体育用具室という爆弾が弾けた。

唯一の出入口をふさいでいたドアが吹き飛び、中にいた一人が勢い
良く部屋から弾き出された。

勢い良く飛び出たそれは、転落防止用に作られたであろう手摺りに
背中からぶつかり、仰け反るように手摺りをこえて落下。

まともに受け身もとれずに

「ゴシヤッ」

という音と共に床にぶつかった。

そのまま、まったく動かず、その場が静止画のように部屋全体から
動きが消えた。

……

……

…

ひゅっ…

小さく、何か空気が通り抜けるような音がした。

ひゅっ、ひゅっ、ひゅっ…

「げほっ、ごほ、ごほ、」

ぴくりともしなかった南が急にむせ返る。

ごぼ、ごぼ、ごぼ…

病人のようにむせる口から赤い飛沫が飛び散る。
それが床に赤い斑点つくる。

「きもち、悪……」

ぼそりと呟く。

左右の手足を踏張って立ち上がろうとするが、踏張れずに仰向けになるだけだった。

視界の端にある体育用具室を見つめた。

第24話 暗闇

いまだに暗闇の中に、いた。

四肢は動かず、目を開けているのかどうかすら、怪しい。

回りは暗く、黒く、先も果ても見えない。

「・・・」

彼はそこに横たわるのみで何もしていない。

そこに

「彼」

と言う存在があるのか？

動かない四肢と見えない暗闇は限りなく自分の存在を不明確にする。それでも彼は自分をなくさなかった。

無くせなかった。

自分の中の明確な自分。醜く、汚く、狡猾で、認めたくなくても認めている。

（「俺は・・・」）

暗闇は容赦なく意識をも浪費させる。

刻一刻と自分を形成する自分が消えていく。

（死んだのかな？）

ふと浮かんだ想像もすぐに水泡となってどこかへと消える。

（・・・）

思考さえも暗闇に侵食され、存在事態が危うくなっても慌てていない。

「いや、とうに

「危機感」

が消えてしまっているのかもしれないが。

自分を自分が認識できなくて誰が自分を初めて認めるのだろうか。

自分が自分であるために今日まで自分という人格を自分に形成させてきていたというのに。

「死」というものかもしれない。このようなものだとしたならば。

(…なんて、つまらない)

自分が自分でなくなる。

それはつまり他人が自分と一緒にになり、さらにいえば自分すら自分ではなく他人になってしまうということ。

(それは、困る)

ならば思い描こう。

たいしたことのないささやかな抵抗かもしれないけども。

この暗闇で、自分というものをできうる限り思い描こう。

今まで自分が目で見て、肌で感じて、耳で聞いた自分を表現するすべてをまぶたの裏に思い描こう。

(このまま消えるように死んでたまるか)

ささやかなだけでもはつきりとした死への抵抗。

「俺は、まだ、生きているんだ」

何も見えない、何も聞こえない、何も感じないはずの世界でなぜか、その声は響いた。

第25話 化け物

もうもうと拡張された入り口から溢れだす、煙だか石灰紛か分からないもの。

霞がかった視界でそれでも南は真っ直ぐに出入り口をみていた。

全身火傷の上、二階からの転落による全身打撲。

火傷のヒリヒリとした痛みに、しかし打撲により壊れたらしい腕は悶えるどころか、摩ることさえ出来ないほど。

それでも。

じっと見つめる。

拡張された入り口の更に奥を。

煙によって塞がれた視界の更に奥を。

そこにいるはずのモノを探すように。

満身創痍で尚、戦意を失わず。

ガラッ…

わずかに物が崩れる音。

それに過剰な反応を示す。

「糞ガキイイイイ!!」

続く叫び。

小さく舌打ちをする。

やはり、生きていたか。

(当然か…)

人間の自分が生きてる時点で化け物も当然生きている。

恐らくは、致命傷を与えるためにはこちらが即死するほどの相打ちが必要なのだろう。

唯、残念なことに、既に武器になるものはない。

手足は動かないし、視界は霞がかっている。

意識は繋ぎ止めているのがやっと。

口は粘つく鉄の味。

白い空間から出てきたそいつは、腕が変な方向に捻れていた。

その腕にある妙な模様は紅い色からかけはなれた、黒ずんだ色をしている。先ほどまで明滅していた明るさは全く感じられなかった。

手摺を面倒臭そうに片腕で捻りきり、そのまま目の前に飛び下りる。

「全く、ここまでされたのはいつぶりだろうなあ？」

全身から血を流し、それでも歪んだ笑顔は南を捕えている。捕えてはなさない。

「こんな時はどうしてたかな……」

少し考えるように南の全身を見渡し、一蹴り。

「！」

声すら出せずに勢い良く吹き飛ぶ。

「貴様でうさばらしでも、するか」

先ほどまでの、食欲に支配された眼ではなく狂気に取り付かれた目。ぴくりともしない南のわきまで歩みより胸ぐらを掴み上げる。

人形のように力なくだらんとした南からはぼたと血液が垂れ、床に奇妙な斑点を刻んでいた。

「まだ、死ぬなよお？これからたつぷりと生き地獄を味あわせてやる」

「……」

ゆっくりと。

本当にゆっくりと。

瞼を開けた。

少しも戦意を失っていないその眼光は鋭く化け物を貫く。

「…なんだ、その目は。気に入らん」

言うが早いか右目に指を突き刺す。

「ぐぎやああ！ああぎいいやあああ！」

不気味な悲鳴を上げ吊されたまま暴れようとするが、自由がきかず痛みをまぎらわすことができない。

「これで少しはましな目をするだろう」

突き刺した指を引き抜き、まとわりついた血液やら体液を払う。
パタパタ…。

ぬるりとしたそれは、斑点をつけて床を汚した。

「うああ…ああうかつ…はあ…」

先ほどよりは落ち着いてきたようだがまだまだ荒いままの息。

「脆いな」

一言そういつて再生仕掛けているもう片方の手で頭部をひとつかみにしてくる。

握りつぶせそうで、ねじり切れそうな細い首。

「せめていい声で鳴け」

ごとり。

にぶいおとが、した。

第25話―起床―

音は、ありえないところから聞こえた。

首はまだ体に繋がっている。

いまだに中に浮いている体。

その、向こう側。

化け物の背中越しに音が聞こえた。

思い何かが落つこちた音。

かろつじて見える左目は、かすんだ視界にしつかりとそれを捕らえた。

すでに黒と白でしか構築されていない世界のなかで、ゆっくりと立ち上がるうとする影。

辺りにあるモノにつかまりながら何とか立ち上がるうとしている。

生まれたての馬がどうにか立ち上がるうとするように。

立ち上がるうとするたびに体制を崩し、音を立てる。

ゴトリ、ゴトリ。

力なく倒れた瞬間に強く頭を打ち、それが物が落ちたような鈍い音を出していた。

・・・いまだに俺の首は落とされない。

そいつも、その音に驚いているのかもしれない。

いつでも離れられるはずの首と体がくっ付いたままなのだから。

ゴトリ。ごとり。・・・ガッン！！

一際激しく頭を打ち付けた。

後はひざを伸ばすだけだというのにそこで一気に倒れこんでしまった。

「……」

「……」

「いてえ……」

影が、声を発した。

呻く様な……いや、むしろ寝起きに出すような声？

だけど聞き間違えるものか、それはあいつがいつも教師に居眠りを注意されてたたき起こされるときに出す声。

白と黒のだいぶ昔のテレビのような景色でもそいつの姿ははっきりと見える。

制服の胸元は大きく破れているようだけど。

ついにしっかりとした足取りでそいつはたった。

野村はしっかりと地に足をつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0323a/>

SOUL EATER

2010年10月13日04時15分発行